



幼児の性格教育

お茶の水女子
大學助教

吉田昇

一體すべての行動は、みな目的を持つてゐる。それと同様、教育にも目的はある筈である。然るに、今まで、幼児教育の目的はと言うと、それは餘りに漠然としていた。というのは「子供は自由にのばすべきもので、教育の場合目的は持たぬ方がよい」という考え方が有力であつたからである。

かゝる考え方は、昔の教育において、幼児のときから嚴重にしつけて、惡の根源をなくして行つた方がよいという、教え過ぎる教育があつたのに對する反省から生れたものであつた。幼児教育における自由を謳歌する傾向は、フレイベル以來の傳統であるが、最近においても大いに力説されている。二十世紀の初めに、イタリーのモンテッソリーは、貧困な家庭の子供のみを集めて幼児教育を行つた。モンテッソリーは、醫者の出身であつたが「貧困な家庭の幼児でも、自由にのびのびと育てることにより、豊かな家庭の子供に劣らぬ知能が発育する筈である」と考えたのである。一九三六年の著書に「兒童の神秘性」という本があるが、その題名に示すよ

うに彼女の考え方は、兒童の中に神秘性を認めようとしている。つまり「子供は必ず芽生えを持つてゐる。大人はそれを伸ばしさえすればよいので、大人にとつて大切なことは、子供に餘り干渉しないことである。」と言つた考えがあるのである。もとより、モンテッソリー自身のやり方は、決して幼児を甘やかしたのではなく、自由と獨立とは一つの事の表裏であるといつて、壓迫を感じないように嚴格なしつけを行つていたのである。

しかし、このような考え方について見ると、或場合には幼児の神秘性が餘りに強調され、子供自身の中に目的があるのだからと、大人の指導する餘地をなくしてしまふ傾向が見られることが少くなかつた。そして極端な場合には、自由が放任になつてしまふ。従つて幼児の神秘性を認める考え方は、人間社會を明るくする藝術的な表現はあるが、科學的でないというのが正しいであらう。

事實に基づくならば、子供には善も惡もわからない。子供

は基本的な衝動と条件反射のみを持つてゐるのである。これを如何に向けるかによつて、子供は良くも悪くもなる。遺傳はその子供個々により定つてゐるが、環境の方は自由に變へることが出来る。故に、環境をかへることによつて、或る程度まで異つた結果を作り得る。その影響は決して少くはないのである。例えば、一人子には、社會性をつける爲に、友達——しかも成るべくは同年令の子供——を與へると、自然の環境のまま放任するのは、その子供の性格の上に大きな相違が現われるのである。

このように幼児教育においても、大人の考へる價值觀念によつて、子供によいと思ふものを與へて行くのがよいのである。自由に放任しておけば、自分たちよりはよくなると考へるのは餘りにも樂天的である。人間の世界は、前の時代のものを次の時代に傳へ、次の時代の者はそれを受け、更に進歩させて行かねばならぬ。それが教育というものである。前に述べた消極説 (Negative theory) ——子供は自身の中に目的を持つてゐる。大人はそれに干渉せぬ方がよいという説——は大人が自分の責任を回避してゐるのだとも言へる。大人は、子供を小さい大人に作り上げてはならないが、その逆に放任も間違である。子供をありのままにみつめて、目的をはつきりさせて導いて行かねばならない。大人達の社會が失敗を経験した場合には、その事を反省して、次の世代にその失敗をくり返させぬ様に、注意して積極的に導いて行くべきである。それでは、幼児教育の目的とは何か。勿論、複雑な科學知

識などを教えたりすることが目的ではない。その様な個々の知識や理解でなく、これ等を理解する基礎となる様な態度を作ることに、これが幼児教育の目的である。幼児の時代は、性格の發達する時期で、後の生活の基礎となる性格が形づくられる時期であるから、この時代に積極的に、内容のある性格を與へる必要がある。單に悪い影響を避けるだけでなく、積極的にどの様な性格が望ましいかを考へなければならぬ。わたくしは、こゝで、かゝる積極的な内容をもつものの例として、ラッセル (Bertrand Russell) の考をあげて見たい。

ラッセルはイギリスの數學者で、後に社會評論家となつた人であるが、一九二六年に「教育論」という本を刊行してゐる。この本は「特に幼児教育について」という副題をもつてゐるが、その中で描かれる幼児教育の目的は、彼の社會的な考へに影響されて、社會との連關が強く意識されてゐる。彼は、幼児教育の目的は性格に重點が有ると言ひ、現在の缺陷を補うために次の四つの性格が必要であると述べてゐる。

- (一) 活力 Vitality
- (二) 勇氣 Courage
- (三) 感受性 Sensitiveness
- (四) 知性 Intelligence

この四つの目標は、それぞれ身體的發達、情緒的發達、社會性の發達、知的發達の四つの面を代表するものと考へられるから、これらの目標は幼児の發達の全面にわたる代表的な問題ということが出来る。ところで、ラッセルは、この四つの

目的が達成されれば、社會の不幸は大部分除去されるといつてゐる。社會の不幸は制度と性格が作り出し出しているので、社會制度が悪ければよい教育は行われぬ。しかし、そればかりでなく、制度だけがよくなつても教育がよくならなければ、やはり社會悪はなくならない。それ故、彼にあつては教育と制度との改革は並行して考えられてゐるのである。それでは右の四つの目標は、どのような點で社會問題と結びつくのであろうか。この點をラツセルは次のように説明してゐる。

(一) 活力 人間の第一の基礎となるもので、身體とそれに關連して精神的の「活力」は何よりの基である。然るに近代人は次第にこの活力を缺いて來てゐる。この活力を興えることが、幼児教育の一つの目的である。

(二) 勇氣 現代人は病氣等に對し、不必要に恐怖を抱いてゐる。又、社會の惡をよくわかつていても、これを改めようとする勇氣がない。單に權力ある支配者が勇氣を持ち、人はこれに恐怖を抱く。これでは正しい社會とはならない。

(三) 感受性 社會制度や交通などが發達した結果、一つの場所できめられたことが、非常に離れた土地での出來事にもまで關係するといふような現象が屢々見出されることになつた。この爲、感受性が強くなることは現代人としての資格はない。例えば、統計を見ただけで饑餓の状態に同情出來なければ、現在の社會の冷酷さは是正され得ないのである。

(四) 知性 好奇心は誰でも持つてゐる。之を社會に益するよう導くのが知性である。しかし、好奇心はとかく悪

い方向に進みやすい。これを正しい必要な方向に向けて、どんなことも、平靜な感情のもとで判斷出來るようにならなければならぬ。

以上のラツセルの考えは一つの例であるが、この例によつても知られるように、子供と子供の世界だけから眺めて自由に育てるのでなく、社會と關連させて考え、社會の困難を乗り越える爲の教育を考える態度は必要なことである。幼児の教育に當られる方々は、今までに述べたような目的を參考にしながら、もつと、それぞれの現場に即した具體的な人間像を思い浮べて教育を進めてゆかれることが望ましいのではなからうか。

それでは以上のような目的的教育を行うには如何なる方法をとつたらよいか、その目標一つ一つについて方法の問題を考へてみよう。

(一) 活力について 活力を直ちに亂暴と考へてはならない。活力のある子供がかえつて「おとなしい」こともあり得るのである。フランスの心理學者ジャネー(Jaquet)は、「心理的な強さと弱さ」といふ論文の中で、この問題をとり扱つてゐる。即ち、彼によれば、心理的な強さを示す努力といふのは、他の分野のエネルギーを動員してやる力を示してゐる。心理的に強い人は、このようにエネルギーをとつておいて、必要なところで使うことが出來る人である。このように力を他の方から集めてくることも出來ず、又蓄積した力を餘々に

出すことも出来ず、一時に爆發して、後にすぐ力がなくなつてしまふのがヒステリーである。これは心理的な力が強いのではなく、弱いのである。子供はこの傾向があり、すぐにあきたり、急につかれたりする。力を蓄積して、必要な時、徐々に出すことが出来るのが本當に強いのである。

子供がおとなしいという場合には、このように活力があつて、しかもこれをコントロール出来る場合があり得る。これは、よい意味のおとなしい子供である。しかしこれと異つて全然活力がない場合をおとなしいと言ふこともある。後の意味のおとなしい子供、即ち活力のない子供は望ましくない。活力があり、しかもコントロール出来る子供が最も望ましいのである。このように活力のある子供を育てる爲には、食物とか、空氣・日光が重要である。

しかし、子供の活力をつけるのに必要なのは、物理的環境ばかりではない。精神的な環境がこれに劣らない大きな役割を果すのである。精神衛生はこの事實をわれわれに示してくれる。例えば教師に好ましくない子供とは問えば、騒がしい子供だと言う。しかし、精神衛生の上からは退行的な子供、活力のなくなつた様な子供がもつとも悪いのである。

活力のなくなつた子供には、身體的虛弱である場合もあるが、そればかりではなく、フロイドの研究したようなコムプレックスによることも少くない。コムプレックスとは、心の衝動（フロイドでは特に性衝動）が抑壓された場合に起るので、心の中にいつまでもわだかまり、活力が弱まる現象であ

る。劣等感といわれるものも、英語では、インフェリオリテイ・コムプレックスというように、コムプレックスの一つである。劣等感は、やはり自分の要求が満たされないことから起る。しかし、例え一つのことがかうまくゆかなくても、他の事に普通の行動がとれれば、それでバランスがとれて、活力がなくなるところまではゆかない。これに反して、あらゆることに劣等感を感じる場合には、四方八方をふさがれた氣がして非常に大きなコムプレックスとなる。故に、實際の教育に際しては、できるだけ子供の良い點をみつめてほめてやりコムプレックスを作らぬ様にしてやるのが、活力をのばしてゆく爲に、もつとも大切な事になるのである。

(二) 勇氣について 人間の社會には恐怖というものがあ
り、権威の前に卑屈なる人間が多い。故に各人が無用の不安とか恐怖とかを起さぬ様に教育することが大切である。勿論、實際の不安をなくすことは更に大切ではあるが、教育の場合には不必要な不安を助長しないようにすることが必要である。
人間の感じる恐怖は、次の様に分類することが出来る。

自然に起る必要な恐怖

自然に起る不必要な恐怖

人爲的に起る必要な恐怖

人爲的に起る不必要な恐怖

これらの恐怖をできるだけ減少するためには、次のような方法がとられる。

1 人爲的に起る不必要な恐怖を除くこと

例を擧げると、外部から影響されなければ、幼児は暗やみを怖れる本能は能たぬ。ラッセルによれば、彼自身の二人の子供の中、一人は乳母により暗やみに對する恐怖を教えられたという。これは不必要な人爲的恐怖と考へることができぬ。

また、動物に對する恐怖も後天的なものである。例えば大きな音をたて、馬が走つたため、大きな音に對する恐怖が馬にうつり、馬に對する恐怖となることがある。これは偶然的に生じた後天的な恐怖である。このような現象を、人々が無意識の中に人爲的に作り上げてゐることも多い。ある動物を見てゐる時に、周圍の大人が大聲をあげることがあれば、その聲に對する恐怖からその動物を怖れるようになる。

右のような場合、恐怖の必要がなければ、恐れさせぬように育てるのがよいので、その爲には、自然に恐怖の生ずる機会を避けたり、また幼児のそばにゐる大人が怖がらぬことが大切である。「巡査がきますよ」といつておどかすことなどは最もよくないことで、成人して後、權威に對する恐怖を持つようになることがある。要するに、このように不必要な恐怖については、機會や暗示を避けることが望まれる。

2 自然に起る不必要な恐怖を除く

理解は恐怖を克服する。故に理解させて恐怖を取除くようにさせる。例えば、動くものに對する恐怖などは、それが何故動くかを説明することによつて、取除かれる。

權威に對して、理解させずに恐怖を起させることが今まで

行われていたが、これは封建社會の制度であつた。この恐怖に對する最もよい方法はやはり「理解」である。

3 必要な恐怖を持たせる場合

自然に起るのはそのまゝでよいが、人爲的に恐怖を持たせぬばならぬ場合もある。例えば「崖の上で遊ぶ」ということは、非常に危いが、子供は恐怖を知らぬ。この様な場合には最小限度の必要な恐怖を與へること——理解を主にさせること——が必要である。そして、將來社會に出た時、徒らに恐れていずに、考え、工夫する様になるよう教育することが大切である。それ故、必要な恐怖は、恐怖させることに主眼を置くべきでなく、やはり理解を主とし、できるだけ平靜のうちにはその行動をしなくなる必要がある。以上述べて來たように、恐怖を出来るだけ少くし、理解をもつてこれに代えてゆくという方法が近代的というべきものである。

(三) 感受性について

社會性というのは、クラブ活動、スポーツ等により養われるので、いわゆる正課では養われないうのが、これまでの考え方であつた。そしてその爲に、課外活動(Extra-Curriculum Acting)が重要視され、積極的にやらせるようになっていた、この考え方は現在では一層強まり、その名稱も特別教育活動(Co-curriculum Acting)と言われるようになり、社會性を養うということが次第に正課の中に入られるようになった。

幼稚園では今までの教育が小學校のように讀みかき、算術

などと判きりしていなかつた爲に、現在特に今までと違つた形の教育が行われるというわけではない。たゞ人と人との接觸とか、感受性とかが、今までよりも強調される必要がある。

ルソーは、青年期になつてはじめて、社會に對する感受性が現われると言つてゐる。勿論、精神的な意味での感受性は幼児には望めないが、もつと單純な心理的な感受性は存在しこれが後の精神的感受性の發展の爲に重要なものである。

ラツセルは、自己犠牲 (Self-Sacrifice) は、高い要求で幼児には難しい問題であるが、正義 (Justice) の方は、幼児にも理解を望めることであるといつてゐる。即ち、自分も認め、他人も認めるといふことは、幼児期に芽生え、幼児期に行われるものである。例えば「かわりばんこ」といふ觀念は早くから理解出来る。これが正義の基礎である。故にすべての人間に平等な権利があるといふことを理解させるためには、幼児期のうちから、できるだけはつきりと正義についての考え方を教え込まねばならぬ。

では、これを如何にして教え、理解させるか。

1 子供を増長させぬこと。ほつておけばわがまま (Ego) はとめどもなく増大する。だが、これが増長して來ると感受性がなくなつて、思ひやりがなくなつて來る。わがままに育つた子供は、その子供自身が社會に出る時に、非常に苦勞する。子供はわがままが一度通ると、尙それを利用してしようとする故に幼児の教育に當るものは、子供のわがままと、必要とをはつきり區別して導くことが大切である。

日本の子供の方が、ヨーロッパ人の子供に比べて反抗期の出方がおそく、しかも長いことが知られてゐるが、これは日本では子供だからといつて子供のわがままを許しすぎるからで、ヨーロッパでは、早くから子供の我儘を抑へてゐる爲であると思われる。それ故、わが國では特に意識して、わがままは早くから抑え、正義の觀念を早く植へるべきである。

2 想像の世界に子供を住ませ、次第に現實えコントロールして行くことが望ましい。子供はわがままを抑えられると或種の劣等感を感じるようになる。これは、平等の基礎に立つた場合、自分の権利が、大人と同様には認められていないことを理解するからで、こゝで、子供は、想像の世界に住むようになる。これを補償行動という、つまり、想像の世界に於て、大人と同じ支配力を持つ。故に玩具やお話が、子供にとつては現實の世界と同等以上に大切になる。かゝる想像の世界をもつことは、誤りでなく、必要なことである。しかし、これが想像の世界だけで終り、白日夢に耽溺するようになることは弊害がある。それ故、この想像の世界から次第に現實の世界に引戻して行くことが望ましい發達である。以上述べた二つではまだ公平の觀念は生れない。

3 對人關係——しかも對等な對人關係——がなければならぬ。大人の中に子供がいるのでは、正義の基礎は出來ない兄弟姉妹があれば、或程度は與えられるが、しかし兄弟の場合、年令的に差があるので對等とはゆかない。同じ年令の子供が集つて生活をする事が必要で、幼稚園や保育所は、そ

のような觀念を興え得る最適の機會を持つてゐるわけであるしかし、ただ集つただけでは駄目で、常に適切な指導が必要であるが、それも常に先生が、先に立つて、わがままな子供を抑えたり、平等にしたりするのは、興えられた正義で役に立たないから、子供同志がお互に、相手の立場を考えて平等にして行くように指導することが望ましい。

子供に正義の念を興えるためにラッセルが最もよい方法として擧げるのが、構成遊びである。子供の中には、破壊ばかりしている子供もあるが、それが自分で何かものを作れるようになつたり、作つた經驗を持つ様になると、始めて人のものを大事にするという正義感を持つようになるのである。構成的活動というが、必ずしも物を作らなくてもよいので、お話でも、遊ぶことでも「まとめる」ということをすれば「こわさずになりたい」という考え方の基礎となるのである。

幼稚園では、よく砂場で遊ぶが、人の作つたお山をこわしてばかりいる子供がある。この様な子供も一度自分で砂遊びが出来るようになると、殆んど他の人ののをこわさなくなる。これに反し、集團でする競争は、自分のグループには構成と、他のグループには破壊を望む點で、両者が混合してゐると見ることが出来る。それ故、この場合相手をこわすということにのみ力が注がれると、正義からは遠ざかることになる。相手を悪く言つたり、輕蔑したりするようなことは、教育のやり方としては絶対に避けなければならぬ。

(四) 知性について

人間の知性は、大人になつてから芽生えるもので、子供の時は遊んでいればよいと昔は言われた。しかし、その後、考え方が變り「知的な判断」とは、長いこと實際の行動の中で訓練されて、それが基礎となつて始めて發達して行くものであると考えられる様になつた。具體的な思考は、大人の社會を正しく運行させてゆく爲に抽象的な思考よりも、大切である。それ故、幼児期においても、知的訓練を興えることは非常に大切である。

知性と知識とは異なるもので、知性とは考えること、知識とは考えた結果を知ることである。子供の言葉により、それが知性であるか、知識であるかを區別することは、非常に困難である。

子供の本當の知性というのは、大人から興えられることから始まるのではなく、問題に感じるといふ洞察から出發しなければならぬ。

デューイは「いかに思考するか」(How we think)という本の中で、

- 1 困難を感じる
- 2 問題の所在を明瞭にする
- 3 可能な解決の示唆
- 4 示唆の論據の検討
- 5 檢證と承認乃至否定

の五項目をあげ、具體的な思考は、以上の段階を通して行わ

れると述べている。

子供にもかゝる具體的な思考をさせ、それが成功する時の喜びを味わせねばならない。この喜びが、彼に物事を多く思考させ、知性を發達させる。子供がいろいろのことにぶつかり、困る機会を與えることが必要である。これは、子供に「考える」ということを教えるのであつて、子供が考へて行つべきものを、大人が先んじてやつてしまつては何もならない。子供に代つてやりたい氣持は、本能的に存在するが、これを抑えて子供自身に問題を解決させなくてはならない。その爲には

1 やたらに困らせぬこと、餘り多く困らせると、考へる勇氣を失う。

2 問題の選擇 子供自身に解決出来る問題と與える

3 問題解決の手段を與える。しかし、餘り早く與えずぎぬ様、又與え方を常に考へ、先生の考へ方によつて與えるのではなく、子供の考へ方によつて、それを助けるように與えるのである。

このような考へ方に對して、子供は何も教へられない間は何も考へることはできないという考へも存在する。こゝで知性と躰について兩者の關係が問題となるのである。

この點については、次のように考へられる。實際の事を解決するには、洞察がなければならぬが、子供が問題を取上げ、それを解決しようという時は、それまでに身につけたものをもとに行う。即ち、躰とか習慣とかがなければ、人

間は問題を解決することは出来ない。しかも、躰とは、他から與えられたものもあるが、自分が思考し、解決した事についての躰もある。即ち、自分が解決したことをくり返し、練習し、それが習慣となつて定着し、次の問題解決に役立つこともあるのである。この二つの中では後者の自分で解決したことについての躰の方がより望ましいのである。教育においても、餘りいそいで、多くのことをしつけようとするよりは子供自身が自分で意味を發見したものを繰返して身につけるような躰が中心を占めなければならぬと思われる。

以上、ラッセルの幼児教育の目的を中心として、その方法を最近における研究を参照しながら吟味して見た。私は、これまで述べて來た目標や方法が、幼児教育の動かすべからざる内容であるとは、決して考へていない。ラッセルが教育論を書いた時と現代とは、時代も異つてゐる。またわが國は敗戦といふことも經驗してゐる。それ故、教育の目標の上でも、これらの社會事業を反映した新しい目標を考へられるかも知れない。たゞ私は、このような新しい目標を考へる場合にも、ラッセルの所論は、幼児教育と社會との連關について極めて積極的である點で、参考になるところが多いと考へたのである。われわれは、われわれの經驗を通じて、幼稚園教育の中に、はつきりと積極的に、望ましい目標を指定し古き世代から新しき世代への責務を果すべきではないかと考へるのである。